

【原 著】

多文化共生の視点から見た中国の中等社会科系教科の特質
—中学校地理及び歴史教科書の記述分析を通して—

赫連 茹玉 桑原 敏典

Characteristics of Social Science in Chinese Middle School under Multicultural Perspective
-Through the Analysis of Chinese Geography and History Textbooks-

HELIAN Ruyu, KUWABARA Toshinori

2021

岡山大学教師教育開発センター紀要 第11号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.11, March 2021

多文化共生の視点から見た中国の中等社会科系教科書の特質

—中学校地理及び歴史教科書の記述分析を通して—

赫連 茹玉※1 桑原 敏典※2

中国は人口の多数を占める漢民族と55の少数民族によって構成された多民族・多文化国家である。このような状況を踏まえて、中国では民族意識の形成を中心に、国内の複数の文化の共生を重視した教育が行われている。そこでは、ナショナル・アイデンティティの形成を保障するため、大多数を占める漢民族と55の少数民族、そして華僑に対して「中華民族」という総称を設けた。本研究では、多文化共生を目指す中国の教育において、漢民族と少数民族がどのように描かれているかを明らかにする。それによって、中国が目指す多文化共生教育の特質を明らかにする。そのために、先行研究として米国の教育学者バンクスの多文化教育論を検討した。バンクスの多文化教育論を踏まえた時、中国の中学校地理と歴史の教科書記述における民族の取り扱いにはどのような特質があるか、多文化共生の視点からどのように評価されるかを明らかにする。

キーワード：多文化教育，教科書分析，中国，社会科

※1 岡山大学大学院教育学研究科院生

※2 岡山大学大学院教育学研究科

I はじめに

現代社会においては、国の内外での人口移動が激しくなり、人々が複数の文化に接触する機会がかつてよりも増えている。グローバル化の進展にともない、国際交流や国際理解に関する研究も増加している。そのように研究が進む一方で、国家間の多文化的状況を考えるだけでなく、一国内の多文化化についても考える必要が生じている。中国は多民族・多文化国家として、国内に多様な文化を抱えている。中国は、人口の多数を占める漢民族と55の少数民族によって構成されている。このような状況を踏まえて、中国では民族意識を形成するとともに、国内の複数の文化の共生を重視した教育が行われている。本研究では、そのような中国の社会科系教科書において、多文化共生を目指した教育がどのように行われているかを、中等社会科系教科書の教科書記述の分析を通して明らかにしようとするものである。中国の社会科系教科書を、多文化教育を一つの視点として分析し、その特質を解明することは、欧米とは異なる原理で多文化共生を目指す中国の教育の方向性を解明することにもつながるであろう。分析においては、特に民族の中でもマイノリティに注目し、マイノリティに関する記述がどうなっているかを明らかにする。

Ⅱ 多文化教育に関する理論

1 中国の民族構成と多文化教育

中国は人口の多数を占める漢民族と 55 の少数民族によって構成された多民族・多文化国家である。各民族の文化、言語、宗教は異なっており、経済発展の程度にも大きい違いがある。1949年に中華人民共和国が建国した後、各民族の文化を尊重するために、民族平等という考え方を基盤として民族区域自治制度など、様々な民族政策が推進されている。

また、中国はナショナル・アイデンティティの形成を保証するため、大多数を占める漢民族と 55 の少数民族、そして華僑に対して、「中華民族」という概念を設けた。中国の中学校地理教科書では、「中華民族の長い歴史と輝かしい文明は、すべての民族集団の協働により作られた。中華民族大家庭では、様々な民族文化が融合し、多元的に発展している」と述べられている。また、多文化教育に相当する概念として、中国には「多元文化教育」という言葉がある。中国の「多元文化教育」は、多様性を保証するためにすべての民族が平等に扱われ共生しているという考えを基盤としている。

2 多文化教育とは何か

多文化社会が共生を目指すための教育理論として、米国の教育学者であるジェームズ・バンクスの論を取り上げる。バンクスは多文化教育を次のように定義している。

あらゆる社会階級、人種、文化、ジェンダー集団出身の生徒たちが、平等な学習機会をもてるように学校や他の教育機関をつくり変えるための教育改革運動である。多文化教育のもう一つの目的は、すべての生徒がより民主的な価値観、信念、また文化を超えて機能するために必要な知識、スキル、態度を育てられるように支援することにある。¹⁾

これはバンクスが 20 世紀末のアメリカの多人種、多民族の文化と移民問題が併存する背景を踏まえて考えた定義である。当時のアメリカ社会や学校教育がこの社会問題を解決しなければ、社会階級、人種、ジェンダーなどの集団の分裂は大きくなり、社会の安定と発展の妨げになったかもしれない。このような状況のともで、アメリカの学校を改革し、多文化教育を実施する必要性が生じたのである。学校でどのように多文化教育を実施するかということについて、バンクスは以下のように四つのアプローチを提案した²⁾。

- ① 貢献アプローチ：エスニック文化集団に関する内容が、基本的に各集団の祝日や祝典に限定されているものである。
- ② 付加アプローチ：各集団の文化的な内容、概念、テーマがカリキュラムに付け加えられる。しかし、カリキュラムの構造や目的、特徴は変わらない。
- ③ 変換アプローチ：カリキュラムの原理やパラダイム、および基本的な前提を変え、生徒が異なった視点から概念や論点、テーマ、問題を考察することを可能にする。

④意思決定・社会的行動アプローチ：変換カリキュラムをさらに発展させて、学習した概念や問題，論点に関連した個人的，社会的，市民的な行動プロジェクトや活動に取り組む能力を生徒に身につけさせる。

これは，生徒が多文化教育に関する知識や関心を持っているだけでは不十分であり，多様な視点から批判的に考え，実際の社会活動に取り組む能力を身に付けることが重要であることを意味している。従って，生徒にとって理論を学ぶことにとどまらず，実際に社会の中でそれを活用できることが重要である。

バンクスの論からも明らかであるようにアメリカ合衆国の多文化教育の中心的な関心は人種問題である。それに対して，日本の多文化教育の中心的な関心は何か。日本の多文化教育について，森茂岳雄は以下のように述べている。

多文化共生に向けた教育の取り組みは，マイノリティである在日外国人児童生徒，特に近年はニューカマーの児童生徒のための教育支援の問題として実践され，語られてきた。…（中略）…

多文化共生に向けた教育の取り組みは，マイノリティの児童生徒のための教育支援と同時に，マジョリティである日本人児童生徒を含むすべての児童生徒に多文化共生にむけての資質をいかに育成するかという視点で考えることが重要である。³⁾

日本の多文化教育は，在日外国人児童生徒の問題を中心に組み立てられており，多様な文化的背景を持つ人々の共生が課題となっている。そのうえで，森茂は，多文化教育の対象はマイノリティだけではなく，全ての人であると述べている。

多文化教育の定義や目的は，一つではない。それを実施する国の歴史的な背景や現実社会の状況によって目的，対象，方法が異なっている。本研究では，以上のような多文化教育の考え方をふまえて，中国の多文化教育にどのような特質があるかを，教科書記述から明らかにしていきたい。

Ⅲ 多文化教育に基づく教科書分析研究

本章では，ジョセフ・セルニアック (Joseph Czerniak) の「アメリカにおける黒人奴隷の反乱の記述とマイノリティの表現—1950年から2005年までの歴史教科書を例に」を手掛かりに，多文化教育の視点からの教科書分析の方法を検討する。この論文では，量的研究と定性的研究を通して，アメリカの歴史教科書における黒人奴隷の反乱の記述とマイノリティの表現を分析している⁴⁾。論文では，アメリカの1950年から2005年までの歴史教科書について，10年に一冊の教科書を取り上げて考察している。ジョセフ・セルニアックは各教科書の中で黒人奴隷の反乱に関する記述のページ，単元，章，言葉，図，グラフなど構成要素の頻出の度合いから，教科書の著者の意図などを分析している。例えば，以下のように述べている。

著者はナット・ターナーの反乱を説明するために37の言葉を使用している。教科書はターナーが導いたバージニアの説教者であり，「55人または60人の白人が殺され，ターナーを含む少なくとも100人の黒人が殺された」と述べている。著者は，黒人も命を落としたことを認めるが，文章

の中では詳細が記載されておらず、その反乱が南部の他の反乱が発生するきっかけになったと述べているだけである。⁵⁾

このような結論は、言葉の頻出度と記述の分析に基づいている。これ以外にジョセフ・セルニアックは黒人奴隷の反乱に関する教科書の記述について、記載されている人物の記述に、人種の違いによってどのような違いが見られるか、記述の重点に違いがあるか、筆者に人種的偏見があるか、筆者の表現はどのようなメッセージを含んでいるかを明らかにしている。

このような分析は、教科書執筆者の意図に注目したものである。教科書執筆者の意図が学習者に何らかの影響を与えることは容易に予想できることである。このような研究の成果は、教科書を使っていかに歴史を教えるかということを考えるうえで大いに示唆を与えてくれる。また、今後の教科書内容の改善にも役立つであろう。また、教科書を使った授業から、子どもがどのような歴史認識を形成するかということを考えるうえでも参考になる。

IV 中国の中学校社会科系教科書の民族に関する記述の分析

1 教科書の選択と分析視点

研究対象とするものは、中国の統编版の中学校地理と歴史教科書である。統编版は「中華人民共和国教育部中小学統編教材」の略語で、中国の教育部（文部科学省にあたる国の機関）に属する人民教育出版社が作った教科書である。2016年には、いくつかの省と市で試行的に使用された。2017年から中国すべての小学校1年生と中学校二年生で使われ始めた。2019年からは、中国すべての小中学校は統编版を使っている。以上のように、統编版の中学校地理と歴史教科書は中国を代表する教科書であり、本研究の分析対象として取り上げることが妥当であると考えられる。

分析の手順としては、まず、中学校地理と歴史教科書の民族に関する記述を取り出して整理する。次に、それぞれの民族の頻出度を確認する。そして、それぞれの民族に関する教科書記述の特徴を明らかにし、最後にその記述の背後にある共生の原理を明らかにする。

本論文では中国国内で公式に認められている56民族を対象として、人口の多数を占める漢民族をマジョリティとし、55の少数民族をマイノリティとした。

2 各民族の頻出度合

ここでは、中学校地理と歴史の教科書における民族に関する記述の中での、各民族の頻出度合について検討する。地理と歴史の教科書では、21の民族が直接的に取り上げられている。古代の内容の中で記述した民族は14の民族である。教科書に登場する頻度が多い順に列挙すると、モンゴル民族、漢民族、鮮卑、契丹、満洲民族、女真、ウイグル、匈奴、党項、羌、羯、吐蕃、氐、回鶻の順となる。現代史の中で直接的に取り上げられている民族は満洲民族、回族、ミャオ族、ウイグル族、イ族、トゥチャ族、モンゴル族、チベット族という8民族である。また、カザフ族、朝鮮族、チワン族は直接的には記述されてい

いが、教科書の挿し絵の中で、これら三つの民族の文字が取り上げられている。教科書掲載の中国の民族分布図では、すべての民族を取り上げられている。その中で、古代でも現代でも取り上げられ、登場回数が多い民族は漢民族、モンゴル民族、満洲民族、ウイグル族の4つである。古代史で登場する民族の中には後の時代に、滅亡したり、他の民族に吸収されたりして、現代の56の民族の中に入っていないものもある。例えば、鮮卑族や匈奴族は現代史の中では登場しない。

取り上げた民族の中で、モンゴル族は少数民族の中で記述が最も多い民族である。中学校一年の歴史教科書下巻の第10課「モンゴル族の奮起と元の成立」と第11課は「元の統治」はすべてモンゴル族に関する記述である。少数民族の中で記述が二番目に多い民族は、鮮卑族である。漢民族という言葉は21回登場する。登場回数は最多ではないが、その記述は特定の単元に限定されず様々な単元で言及されている。漢民族自体の紹介や生活様式についての説明はほとんどなく、他の民族との関わりについての説明が多い。

中学校一年の歴史教科書の内容は中国の古代史で、43課の中で7課は民族に関する記述であり、古代史内容の約16%を占めている。二年の歴史教科書の内容は中国の近代史と現代史で、47課の中で民族に関する記述は1課しかない、内容の約2%を占めているに過ぎない。中学校二年の地理教科書の内容は中国の地理で、24節のうち一つの節に民族に関する記述があり、内容の4%を占めているに過ぎない。以上のことから、古代史において民族に関する記述が多く、現代史において民族に関する記述が少ないということが言える。その理由については、推測の域をでないが、現代中国が「中華民族」を強調し、56の民族が同じ共同体として共同して社会を作ること重視しているため、現代に近づくほど個別の民族の記述が少なくなっているのではないか。

3 各民族に関する記述の特徴

学習者にとって主要な教材である教科書は、その考え方や認識に大きな影響を与える。本節では各民族の記述の特徴を明らかにしていくが、分析にあたっては、まず、近代以前について、民族の外見的特徴についての記述を取り上げる。次に、漢民族が作った政権と少数民族が作った政権の関係についての記述を取り上げる。その後、現代史における民族の記述を検討する。

次に挙げているのは、匈奴族等の生活についての記述である。

馬に乗るのが得意な匈奴族の生活は、遊牧から農業へと徐々に移転し、鉄や陶芸などの手工芸品産業を発展させた。山西省南部の羯人のほとんどは、農業に従事し、織物が得意で、蒼い服を好んで着る。(資料下線4)

民族集団を紹介する際に、よく取り上げられるのは食べ物、服装、祭りや祝日という三つの要素である。これらは全て、外見的特徴である。このような記述は他の民族についても共通しており、少数民族について記述する際には、外見的特徴を重視していると言える。一方でそれぞれの民族が持っている特有の考え方や価値観などへの言及はほとんど見られない。もちろん外見的特

徴は重要であるが、民族の内面についての理解が深まらなければ相互理解を促進することは難しいのではなかろうか。

次に取り上げるのは、マジョリティの漢民族とマイノリティの吐蕃族の交流に関する教科書記述である。

唐太宗の際に、吐蕃族の普松贊乾布はチベット高原の各部落を統一し、ラシエに首都を定め、生産・制度など一連の改革を実施した。彼は中原の文化を慕い、何度も唐に使者を送って、姫様と結婚したいという気持ちを伝えた。太宗は文成姫を嫁がせ、使者として文成公主を派遣した。文成公主はチベットに行く時、穀物の種、薬種、お茶、芸術品及び暦法、科学技術の書籍などを持参した。それに加えて、多くの職人が随行した。職人たちは寺を建て、大昭寺の建立に参画した。松贊乾布は中原の文化をより良く学ぶために、貴族の若者を長安に派遣して勉強させた。また、唐朝に蚕と各種の専門技能を身につけた職人が欲しいという希望を伝えた。唐と吐蕃族の政略結婚は、吐蕃の経済と社会の発展を促した。両民族の友好関係は芝居、壁画、民間歌謡など様々な形で中原とチベットに広まった。(資料下線8)

中原は、黄河中下流域にある平原のことである。歴史上、中原はほとんど漢民族の勢力下にあった。吐蕃族については、「中原の文化を慕い」、「中原の文化をより良く学ぶため」、「専門技能を身につけた職人が欲しい」と記述されている。マイノリティの民族のもつマジョリティの文化へのあこがれ、尊敬の気持ちが強調されている。それに対して、マジョリティについては、「文成姫はチベットに行く時、穀物の種、薬種、お茶、芸術品及び暦法、科学技術の書籍などを持って行った」と「多くの職人を随行した」と記述されている。このように漢民族の政権が吐蕃族を支援する姿が描かれる一方で、逆に漢民族が他の少数民族から支援される姿が描かれることはない。このように、マジョリティとしての漢民族の優位な立場が強調されているように思われる。実際に吐蕃族が漢民族に及ぼした影響がどのようなものであったかについては、別途検証されなければならないだろう。

先の唐の時代の記述は、政権をマジョリティの漢民族が持っている時のことであるが、逆にマイノリティが政権の時の記述はどのようになっているだろうか。次に、鮮卑族による改革に関する記述を取り上げてみよう。

北魏孝文帝が即位すると、改革を決めた。494年、洛陽に遷都し、鮮卑族を含む北方各族の百万人ぐらいを中原に移住させた。彼は更に漢化の政策を推し進めて、官吏に朝廷の中で必ず漢語を使用させ、鮮卑語は使用禁止とした。鮮卑服を漢服に代えた。鮮卑の苗字を漢民族の苗字に改めた。鮮卑の貴族と漢人の貴族の婚姻を奨励した。両漢、魏の官制、法律などを採用した。これらの政策は、民族の融合を促進し、北魏の国力を強化した。(資料下線5)

このような記述は、マイノリティの鮮卑族が、多くの漢民族が住んでいる中原に移住した際、鮮卑族の孝文帝は国の統治を速やかに行うために、積極的に

漢民族の文化を吸収し、漢化を進めたということを意味している。また、以下は当時の漢民族の生活の変化に関する記述である。

漢民族の人々は北方各民族の人々に牧畜の経験を学び、また彼らの食事、服装、用具などを学び、生活の融合が進んだ。(資料下線6)

孝文帝の改革後、中国語は北方の重要な共通語となった。漢民族の人々も西北民族の楽器や歌舞などを好んだ。(資料下線7)

これらの記述からは、民族融合の過程における漢民族の少数民族への影響は文化、制度、法律など文化・社会面であり、少数民族の漢民族への影響は食事、服装、用具など生活・生産面であることが分かる。このように影響を与える領域が限定されていることには、意味があると思われる。漢民族の少数民族への影響は文化・社会など世の中全体に関わるものであるのに対して、少数民族の漢民族への影響は個人の生活に関わるものに限定されていると言えるのではないか。近代以前の記述からは、漢民族の少数民族に対する優位な立場が強調されているように感じられる。

次に、現代社会における記述を地理の教科書から見ていきたい。

私たちの祖国の広い土地では、56の民族集団が一緒に暮らし、統一と調和の中華民族大家庭を構成している。漢民族は、中国の人口の約92%を占め、中国の民族の中で最も人口が多い。他の55の民族の人口は少なく、少数民族と呼ばれている。各少数民族の人口は様々で、その中で満洲民族の人口は最も多く、1600万人を超えている。満洲民族、回族、ミャオ族、ウイグル族、イ族、トゥチャ族、モンゴル族、チベット族の人口は500万人を超えている。人口が少なく1万人未満の少数民族もいる。我が国の憲法は、民族の大小を問わず、すべて平等であると定めている。(資料下線1)

漢民族は全国各地に分布しており、少数民族は主に南西部、北西部、北東部に分布している。ある特定の民族が居住する地域にも、他の民族が居住している。国勢調査データによると、いずれの県や市も単一の民族集団で構成されているということはない。我が国の民族分布は「多くの民族が分散して居住し、一部分が一か所に集まって居住し、雑居している」という特徴がある。(資料下線3)

56の民族の中で、人口が多い民族が取り上げられている。民族の記述について、社会の状況、各民族分布の特徴、民族制度、政策など外見的な特徴が記され、ここでも歴史同様に民族間の価値観や考え方の違いについては説明がない。また、民族の持つ風習や生活様式などの説明もなく、マジョリティでもマイノリティでも、皆同じ共同体であるということが強調されている。

4 多民族共生の原理

マジョリティと多数のマイノリティが一緒になって一つの社会を作る時、統合のための原理が必要である。多民族国家である中国は56の民族を統合するための原理を持っている。その一つが「すべての民族は平等である」であり、もう一つが「すべては中華民族として一つの民族である」である。中国の多文

化教育は民族平等という考えを基盤としており、地理教科書の中でも「我が国の憲法は、民族の大小を問わず、すべて平等であると定めている」(資料下線1)と述べられている。しかし、現実には民族や地域によって経済状況や生活のレベルに違いがあり、それぞれが完全に同じように扱われているとしたらその差は広がるばかりである。この点について、川崎誠司は、次のように述べている。

多様な集団が共存するには、すべての構成員を同じに扱っても満足度は高まらない。むしろ差別は強まり格差は拡大する。共存の在り方について考えることは、人間のもつ不平等をどう調整するかということである⁶⁾ その不平等をどのように調整するかということについて、中国は以下の対策を実施している。

国家は多くの優遇政策を実施し、大量の人を派遣し、また技術、資金、物資などの様々な支援を通じて、少数民族区域の経済を強化し、各民族の共栄と発展を促進した。各民族も自分の地域の実情に合わせて、自らの力を発揮し、経済を発展させ、大きな成果を上げた。少数民族の地域の経済は発展を遂げ、すでに中国国民経済の重要な構成部分となり、少数民族の人の生活水準が高まっている。(資料下線10)

つまり、平等は基礎であるが、経済的社会的に弱い立場にあるマイノリティに必要な支援を提供することが重要だとされている。不平等を放置すればどうなるかについて、教科書では元の四等人制を紹介して説明している。

元の統治者は漢民族とほかの少数民族に対する統治を維持するため、全国民をモンゴル人、色目人、漢人、南人という4つの等級に分けた。モンゴル人は第一等として、各種の特権がある。色目人は党項人、畏兀人など西北の諸族出身の人々を指す。漢人は淮河の北方、元金の領内の各民族の人と、四川・雲南両省の人を指す。漢民族以外に女貞人、契丹人がいた。南人は、おおむね南宋を統治した漢族人を指す。各等級の人は政治、経済、法律上平等ではなかった。このような民族差別政策は、社会の不安を引き起こし、元朝の滅亡の重要な原因の一つとなった。(資料下線9)

モンゴル族が行なった民族差別政策は、悪い結果しかもたらさなかったということである。教科書では、学習者に対して直接的に民族平等の重要性を強調してはいないが、好ましくない事例を示すことで各民族が平等に共存することが大切であるというメッセージを伝えているのである。

共生の原理としては、もう一つ「すべては中華民族として一つの民族である」という考え方がある。中国には56の民族があるが、ナショナル・アイデンティティの形成を保証するため、大多数を占める漢民族と55の少数民族だけではなく、「中華民族」という総称を設けたのである。地理教科書の中で、「中華民族の長い歴史と輝かしい文明は、すべての民族集団によって共同で作られた。中華民族大家庭では、様々な民族文化が混ざり合い、多元的に発展している」(資料下線2)という記述がある。マジョリティの漢民族であっても、マイノリティの少数民族であっても、皆同じの「中華民族」の一人であるというアイデンティティを学習者に育成使用としているのである。また、「統一の多民族国

家」という言葉も何度も登場する。各民族の多様性を尊重し、すべての民族が同じ共同体に属していることを強調しているのである。

V おわりに

今回分析の対象として中国中学校地理及び歴史教科書の民族記述に関しては、次の三つの特質を明らかになった。

第一は、各民族の外見的特徴を重視していることである。教科書には、各民族の風習、服装、用具、生活様式などが多く記述されている。第二は、歴史においては、各民族は漢民族との関わりの深さや、構成の歴史に与えた影響の大きさに比例して記述の量が増え詳細になるということである。歴史的には、教科書に取り上げられた 14 の民族以外にも多くの民族が存在している。しかし、全てが取り上げられているわけではなく、特に南方の民族についての記述は極めて少ない。取り上げられる民族は、自分たちの王朝を作ったか、あるいは漢民族との関わりが非常に深いものに限定されている。第三は、民族の多様性を重視する一方で、すべての民族が同じ共同体に属していることを強調していることである。現代においては、民族の多様性を尊重したうえでナショナル・アイデンティティを育成するために、「中華民族」という総称が設けられた。そのため、「統一の多民族国家」という言葉が、教科書に何度も登場している。個別の民族を強調するのではなく、どの民族も同じ共同体に属していることを重視しているのである。漢民族中心の記述がなされるのはなぜか。この点については、推測の域を出ないが、中原地域が常に中国の中心であり、中原文化が主流文化として位置づけられてきたことと、中原文化が漢民族を代表する文化であることが関係しているのではなからうか。また、歴史を記述する歴史家の多くが漢民族出身であることも、漢民族を中心に歴史が描かれることと無縁ではないように思われる。

最後に、中国の中等社会科系教科の教科書記述を、多文化教育という視点から捉えた際の課題について述べる。第一の課題は、記述が民族というカテゴリーを中心に描かれているということである。民族という枠で多様な民族的アイデンティティを重視しようとしているが、民族という視点からは捉えられない、中国の人々が持っている多様性については説明がなされていない。民族の違いに基づかなくても、人々は多様な違いを持っている。そのような点からの記述も必要ではなからうか。第二は、外見的特徴の違いが強調される一方で、民族間の考え方や価値観の相違についての言及が極めて少ないことである。第三は、公式に認められた民族以外の民族への言及がないことである。中国には 56 の民族以外に、「未識別民族」と呼ばれる人々が存在している。「未識別民族」は、ある個別の民族ではなく、多くの民族の総称である。これらは、人口が極めて少ないため民族として認められなかったり、民族として区分することに異議が示されていたりするなどの理由で、公式に認められなかったものである。2000 年の第六次人口普查（中国の国勢調査）により、中国の「未識別民族」は約 73 万人であり、現在の少数民族人口の 0.697%である。その民族集団の存在

は教科書では全く触れられていない。これらの人々をどのように扱うかという問題は、多文化教育を展開する上での重要な課題となろう。

本研究では、中等教育段階の社会科学系の教科書のうち地理と歴史を取り上げて、民族に関する記述を検討しただけであるが、多民族国家である中国で展開されている多文化教育には、民族の多様性の尊重と平等を理念として掲げながらも、アメリカ合衆国や日本とは異なる特質が見られた。今後は、教科書に基づく多文化教育の実践や、実践を行っている教師や学習している子供たちの多文化教育に対する認識を調査が課題となろう。(本稿は、赫連と桑原が共同で企画・遂行し本稿全体を赫連が執筆したうえで、桑原が調整・修正を行った。)

[注]

- 1) ジェームズ・A・バンクス署/平沢安政訳『多文化教育—新しい時代の学校づくり』明石書店, 1999年, p. 21.
- 2) 同上, pp. 49-53.
- 3) 森茂岳雄「第二章 多文化共生をめざすカリキュラムの開発と実践」松尾 知明『多文化教育をデザインする: 移民時代のモデル構築』勁草書房, 2013年, pp. 22-42.
- 4) Joseph Czerniak “Black Slave Revolt Depiction and Minority Representation in U.S. History Textbooks from 1950-2005”, UW-L Journal of Undergraduate Research IX, 2006, pp. 1- 20.
- 5) Ibid, p11.
- 6) 川崎誠司「第7章 公民教育における公正の学び方」森茂岳雄・川崎誠司・桐谷正信・青木香代子編著『社会科における多文化教育—多様性・社会正義・公正を学ぶ』明石書店, 2019年, p. 111.

[その他の参考文献]

- 1) 森茂岳雄・中山京子「アメリカの歴史教科書における日系人に関する記述の分析」『東京学芸大学紀要』第3部門 50巻, 1999年, pp. 91-105.
- 2) James A. Banks, Cherry A. McGee Banks, *Multicultural Education: Issues and Perspectives*, 10th Edition, Wiley.
- 3) 吉田正生「中学校社会科歴史教科書に現れたアイヌ民族関係記述について—一中近世史記述に限定して」『北海道教育大学紀要 教育科学編』57巻 2号, 2004年, pp. 141-155.
- 4) 吉田正生「中学校社会科歴史教科書におけるアイヌ民族記述(近世史)の誕生—多文化主義的・多元的記述を構想するための基礎作業としての教科書分析」, 『社会系教科教育学研究』第19号, 2007年, pp. 1-8.
- 5) 孫儀「中国における多元文化教育の生成と展開—初期導入の解明に向けて—」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』20号, 2013年, pp. 105-115.
- 6) 相原正義「戦後地理・地理教育を取りまくアイヌ民族記述の検討」『僻地教育研究』55巻, 2000年, pp. 67-78.

【資料1】『地理』（義務教育教科書）人民教育出版社，2017年の翻訳

中学校二年生の地理教科書	<p>第二章 第三節 民族</p> <p>1. 中華民族大家庭</p> <p>私たちの祖国の広い土地では、56の民族集団が一緒に暮らし、統一と調和の中華民族大家庭を構成している。漢民族は、中国の人口の約92%を占め、中国の民族の中で最も人口が多い。他の55の民族の人口は少なく、少数民族と呼ばれている。各少数民族の人口は様々で、その中で満洲民族の人口は最も多く、1600万人を超えている。満洲民族、回族、ミャオ族、ウイグル族、イ族、トゥチャ族、モンゴル族、チベット族の人口は500万人を超えている。人口が少なく1万人未満の少数民族もいる。我が国の憲法は、民族の大小を問わず、すべて平等であると定めている。(下線1)</p> <p>中華民族の長い歴史と輝かしい文明は、すべての民族集団の協力により作られた。中華民族大家庭では、様々な民族文化が混ざり合い、多角的に発展している。(下線2)ほとんどの民族集団は自民族の言語を持ち、一部は自民族の文字を持っている。各民族の建築、食事、服、風習、祝日、芸術、スポーツ、宗教などの文化は、中国の優れた伝統文化を構成しており、世界中の人々から尊敬と関心を集めている。</p> <p>図1. 各民族の言語による「私は中国人」の書き方（省略）</p> <p>2. 民族分布の特徴</p> <p>漢民族は全国各地に分布しており、少数民族は主に南西部、北西部、北東部に分布している。ある特定の民族が居住する地域にも、他の民族が居住している。国勢調査データによると、いずれの県や市も単一の民族集団で構成されているということはない。我が国の民族分布は「多くの民族が分散して居住し、一部分が一か所に集まって居住し、雑居している」という特徴がある。(下線3)</p> <p>中国は、少数民族が集まり住んでいる地域において民族自治制度を採用し、自治区・自治州・自治県・民族郷などの自治機関を設立している。各少数民族は、民族自治地域で自治権を行使することができる。建国以来、わが国の民族自治地域では、国家の民族政策を徹底的に実行し、政治、経済、社会、文化において大きな進歩を遂げてきた。すべての民族集団は、国家の経済建設、社会発展、国境地域の安定、国家の統一に重要な貢献をしてきた。</p> <p>図2. 中国の民族の分布（省略）</p>
--------------	--

【資料2】『中国歴史』（義務教育教科書），人民教育出版社，2017年の翻訳

中学校一年生の歴史教科書上巻	<p>前書き：…(前略)…わが国は2000年前の秦朝から統一の多民族国家である。</p> <p>第17課 西晋の短い統一と北方遊牧民族の移動</p> <p>(前略)我が国の北方の草原には、北方遊牧民族が住んでいる。彼らは水と草の豊かな美しい草原に馬、牛、羊などを放牧し、水草を追って移牧する遊牧生活を過ごしている。「天蒼蒼、野茫茫、風吹草低見牛羊」は彼らの生活の描写である。</p> <p>東漢、魏、晋の時期、わが国の北方遊牧民族は内陸部をずっと移動しながら暮らしていた。もともと北西に住んでいた氏族や羌族は、西から東へ陝西に移住した。モンゴル草原に住んでいる匈奴族と羯族は、北から南へ山西に移住した。また、鮮卑族の一部は遼寧省に移住し、一部は陝西や河套平原に移住した。西晋の時、山西と陝西で移住した民族集団の人口は、すでに山西と陝西の全人口の半分を占めている。</p> <p>図3（西晋時代の少数民族移動の分布図）</p> <p>(中略)</p> <p>十六国時代、各国は互いに攻め合い、経済活動はひどく破壊され、人民の生活が苦しかった。4世紀後半、符氏が建てた前秦が盛んになり、黄河流域を統一した。貴族は漢民族文明の影響を深く受けており、皇帝符堅は漢民族の文化をよく熟知していた。符堅は漢人の王猛を丞相として任用して、鋭意改革を行った。彼らは制度を整備し、法律を勵行し、集権を強化し、難民を支援し、税金を減少し、新たな学校を作り、儒学を提唱した。この時、前秦内の少数民族と漢民族間の対立や矛盾も緩和された。</p> <p>「関連がある歴史的出来事」</p> <p>馬に乗るのが得意な匈奴族の生活は、遊牧から農業へと徐々に移転し、鉄や陶芸などの手工芸品産業を発展させた。山西省南部の羯人のほとんどは、農業に従事し、織物が得意で、蒼い服を着るのが好きである。(下線4)内陸に移動した各民族のリーダーは、だいたい中原文化に敬意を表していた。移動した各民族集団の文化は、漢民族にも影響を与えた。西晋では、洛陽の貴族や官僚は、床机、四角い腰掛けなど北西の各民族の家具を使うのが習慣であった。また、雑居地に住んでいる漢民族も畜産を経営することを学んだ。</p> <p>「事後課題」</p> <p>1. 西晋のいくつかの史料によると、内陸に移動した少数民族は進んで中原地区の歴史と文化を受け入れ、鮮卑族は自らを黄帝の子の後裔と称し、匈奴族の鉄弗部は大禹の後裔と自称した。なぜこれらの少数民族は自分たちのことを漢民族と同族だと考えるようになったか。</p> <p>第19課 北魏政治と北方民族の融合</p> <p>(前略)</p> <p>北魏孝文帝の改革</p> <p>4世紀後半、陰山地区の遊牧民族の鮮卑拓跋部は急速に発展し、北魏を建国した。439年、北魏は北方を統一し、十六国以来の群雄割拠の状況を終わらせた。</p> <p>当時、北方各民族の人民は長期にわたって雑居しており、同じ民族集団が同じ地域に居住することはあまりなかった。内陸に移動した各族は生産、生活と習慣について、漢民族とあまり違いがない。鮮卑拓跋部は内陸への移動が遅かったため、鮮卑族の習慣を維持し、北方地区を統治することが困難であった。</p>
----------------	---

北魏孝文帝が即位すると、改革を決めた。494年、洛陽に遷都し、鮮卑族を含む北方各族の百万人ぐらいを中原に移住させた。彼は更に漢化の政策を推し進めて、官吏に朝廷の中で必ず漢語を使用させ、鮮卑語は使用禁止とした。鮮卑服を漢服に代えた。鮮卑の苗字を漢民族の苗字に改めた。鮮卑の貴族と漢人の貴族の婚姻を奨励した。両漢、魏の官制、法律などを採用した。これらの政策は、民族の融合を促進し、北魏の国力を強化した。(下線5)

北方地区の民族の融合

魏晋以来、内陸に移転した各民族の人々と漢人とは雑居し、定住している。彼らは漢民族の人々に農業技術を学び、それまでの牧畜から農業中心に転換した。漢民族の人々は北方各民族の人々に牧畜の経験を学び、また彼らの食事、服装、用具などを学び、生活の融合が進んだ。(下線6)十六国の北朝の統治者は、漢民族の貴族と連携して中原地域特有の統治方式を踏襲し、絶対君主制で国を治めた。この時期の民族関係は、時には対立が激しさを増し、戦争に至ることもあったが、全体的には民族の疎遠な関係が改善される傾向にあった。北朝の末期、わが国の北方では各民族が融合していた。

各民族間では経済的な交流だけではなく、文化的な交流もさかんになった。西晋の時代、内陸に移動した各民族の大部分はすでに中国語を使用していた。孝文帝の改革後、中国語は北方の重要な共通語となった。漢民族の人々も西北民族の楽器や歌舞などを好んだ。(下線7)各民族は、経済、文化の交流が進み融合するにつれて、精神的にも相互理解がすすんだ。以前の「胡」「漢」の観念は次第に薄くなり、民族間の隔たりと偏見が減少した。

北方地区の民族間の交流と融合により、中華民族の発展に新しい原動力が加わり、中華民族の物質文化と精神文化がさらに豊かなものになり、また、隋唐時代の多民族国家の繁栄と発展の基礎が築かれた。

「事後課題」

1. 右の3枚の絵(略)は敦煌莫高窟の壁画から模写したものである。これらはもともと北方少数民族の座具であり、魏晋南北朝時代に内陸に導入された。絵を踏まえると、民族の交流と融合は漢民族の発展にどのような影響を及ぼしているか。

図3 敦煌莫高窟の壁画からの模写

2. 北魏孝文帝はなぜ鮮卑の苗字を漢民族の苗字に改めたのか。

中学校
一年生
の歴史
教科書
下巻

第三課 唐の景気

(前略)

民族間の交流と融合

唐太宗の際に、吐蕃族の普松贊乾布はチベット高原の各部落を統一し、ラシエに首都を定め、生産・制度など一連の改革を実施した。彼は中原の文化を慕い、何度も唐に使者を送って、姫様と結婚したいという気持ちを伝えた。太宗は文成姫を嫁がせ、使者として文成公主を派遣した。文成公主はチベットに行く時、穀物の種、薬種、お茶、芸術品及び曆法、科学技術の書籍などを持参した。それに加えて、多くの職人が随行した。職人たちは寺を建て、大昭寺の建立に参画した。松贊乾布は中原の文化をより良く学ぶために、貴族の若者を長安に派遣して勉強させた。また、唐朝に蚕と各種の専門技能を身につけた職人が欲しいという希望を伝えた。唐と吐蕃族の政略結婚は、吐蕃の経済と社会の発展を促した。両民族の友好関係は芝居、壁画、民間歌謡など様々な形で中原とチベットに広まった。(下線8)

唐の時代、漢民族と北方の少数民族が雑居し、結婚し、民族間の交流が進んだ。朝廷では、少数民族の人が重要な官職を任用することが多かった。唐太宗は開放的な民族政策を行い、周辺の各族の尊敬を受けた。当時の北方と西北地区の各族の王様は唐太宗を各族の「天可汗」と尊び、これは各族の共同君主を意味した。

「事後課題」

2. 詩の鑑賞と分析

蕃人旧日不耕犁，相学如今種禾黍。……城頭山鷄鳴角角，洛陽家家學胡樂。

——王建『涼州行』

女為胡婦學胡粧，伎進胡音務胡樂。……胡樂胡騎與胡粧，五十年來競紛紛。

——元稹『法曲』

課題：(1) 詩の中で「蕃」と「胡」は何か。

(2) 前文の詩はどのような社会状況を反映しているか。

第7課 遼、西夏と北宋の並立

隋唐時代、北方の遊牧民族の契丹族と漢民族の間に経済的、文化的な交流が増えてきた。唐の末期、北方の漢人が長城の北方へ避難し、中原の先進的な生産技術と生活様式を伝えた。9世紀後半になると、契丹族では農業、製鉄、紡織などの生産が行われ、家や城の建築が始まった。10世紀初め、契丹族の王様であった耶律阿保機が契丹諸部を統一し、上京臨潢府に首都を定めた。阿保機は建国後、生産を發展させ、文字を作り、国力を高めた。

中国の西北地区に住んでいる党項族は、元々は羌族の一派であった。唐の時代、党項族は甘肅東部、陝西北部の辺に集中し、中原文化との接触が多くなり、社会生産が發展した。11世紀前期、党項族の王様元昊が大夏皇帝を称し、興慶府に首都を定めた。歴史上で西夏と呼ばれる。元昊は唐に真似て官制、軍制と法律を立て、農牧や経済を發展させ、西夏の文字を作った。

(中略)

西夏と北宋の関係

元昊が皇帝に即位すると、何度も軍隊を率いて、北宋に攻めた。北宋は攻められ、次々と敗退し、大きな損害を被った。西夏は戦争にはたびたび勝利したが、建国の時間が短く、人的・物的資源に限界があり、長年の戦争によって大きな損害を被って、人民の生活が困窮していた。従って、北宋と西夏が和平交渉を行い、宋夏の契約を結んだ。元昊は宋の臣となり、宋が西夏に貨幣を送った。その後、宋夏の境界の貿易は盛んになった。

「関連がある歴史的出来事」

契丹族は我が国の古い民族の一つである。契丹族は 389 年に歴史文献の中で初めて記載された。契丹人は馬、牛、羊などを放牧し、水草を追って移牧する遊牧の生活をしている。「行営到所即家、一卓穹廬數乘車、千里山川無土著、四時畋獲是生涯」約 500 年間の発展を経て、唐の時代に、契丹族はより強力になった。

「発展的な内容」

北宋と遼と西夏が対峙していたが、お互いに商取引が行われていた。当時、宋と遼、宋と西夏の国境に貿易の場を設け、「榷場」と称した。榷場で、政府と商人は各種の商品を交換していた。榷場の貿易は盛んであった。例えば宋と遼の間で、北宋は毎年榷場から約 1 万頭の羊を購入していた。ある年に遼で干害が起こり、北宋政府の穀倉から 2 万石の粟を購入した。辺境の商取引は経済・文化を促し、各民族の相互理解を深めた。

第 10 課 モンゴル族の奮起と元の建立

チンギス・カンがモンゴルを統一する

モンゴル族は中国北方の古い民族である。モンゴル族は騎射が上手で、草を追って移牧する遊牧の生活を過ごしている。12 世紀には、モンゴルの草原に多くの部族が分布し、お互いに人口、草原、水源、家畜などを奪い合い頻繁に争いが発生した。人々は草原が統一され、争いが終わることを待ち望んでいた。

モンゴル族の統一はテムジンによって達成された。幼い頃のテムジンは、父が部族の紛争で亡くなったため、苦難を経験し、草原の各部族を統一してこそ、草原に平和をもたらし、人々が安定した生活を送ることができると悟った。テムジンは何回も軍隊を率いて、草原の各部落を打ち負かし、1206 年にモンゴルの草原の統一を果たし、モンゴル政権を樹立した。彼はカガンとして擁立され、チンギス・カンと尊敬の意を込めて称された。

モンゴルが西夏と金を滅ぼす

チンギス・カンがモンゴル軍を率いて最初に西夏を攻撃し、西夏は金王朝に助けを求めた。西夏と金がかつて対立していたため、金の皇帝は西夏への支援を拒否した。モンゴル軍の攻撃により、西夏は 1227 年に滅ぼされた。

チンギス・カンは、彼が軍隊を率いて西夏を攻撃する時、六盤山で亡くなった。彼は死ぬ前に遺言を残し、宋王朝を通じて西夏王朝への攻撃を望んだ。その後、モンゴルと南宋が同盟を結び、北方と南方と一緒に金と戦った。1234 年に、モンゴルは金を滅亡させた。

金が滅亡した後、南宋とモンゴルの直接の対立が起きた。モンゴル軍は宋王朝を攻撃するために南へ行き、双方の間の戦争は 40 年以上続いた。

元王朝の成立と統一

クビライはチンギス・カンの孫で、1260 年にカガンを継承した。クビライは、漢民族の儒臣が提唱した「漢民族の法律の実行」、「仁慈の政策の実行」、「勝手に殺さない」という提案を受け入れ、「国を統治し、国民の安全を守る」という政策を実行し、広く言論の機会を設け、官吏の行為を是正し、農業を重視した。彼は中原王朝の統治の方法に従って、様々な行政機関を設立し、元号を決めた。1271 年、クビライは国の名前を元に変更し、翌年、その首都は大都に設定された。

元王朝の建立後、南宋を攻撃し続けた。1276 年、元軍は南宋の首都である臨安を侵略し、南宋が滅亡した。南宋大臣の陸秀夫、文天祥などの人は、南に逃げた宋の貴族を支持し、元との戦いを続けた。1279 年に、元軍は南宋の残党を破った。元は南宋を破り、国の統一を完成し、歴史の中での中国の長期的な分裂を終わらせ、統一された多民族国家のさらなる発展の基礎を築いた。

「関連する歴史的出来事」

チンギス・カンはモンゴルの草原を統一した後、軍事、行政、生産を組み合わせた制度を確立し、モンゴル人を組織し、平時には生産に従事させ、戦時に出征させた。さらに 1 万人の護衛部隊を設立させ、司法機関を設置してモンゴル文字を作成した。これらの措置はモンゴル族の発展を促した。

「問題思考」

クビライは漢民族の儒臣の意見を受け入れて、中原地区の各制度と文化を推進した。これは彼の統一の大事業にどのような作用と影響を与えたでしょう。

「事後課題」

モンゴルの文献資料『元朝秘史』には、12 世紀のモンゴルの草原についてこのような記述がある。

星の空が反転し、人々が反逆した。
自分の部屋に入らず、お互い略奪する。
芝生のある地が反転し、すべての人々が反逆した。
自分の布団に入らず、お互いを攻撃する。

この記述は、モンゴル草原のどのような状況を反映しているか？ その後、この状況はどのように変化したか。

第 11 課 元の統治

(前略)

「発展的な内容」

元の統治者は漢民族とほかの少数民族に対する統治を維持するため、全国民をモンゴル人、色目人、漢人、南人という 4 つの等級に分けた。モンゴル人は第一等として、各種の特権がある。色目人は党項人、畏兀人など西北の諸族出身の人々を指す。漢人は淮河の北方、元金の領内の各民族の人と、四川・雲南両省の人を指す。漢民族以外に女真人、契丹人がいた。南人は、おおむね南宋を統治した漢族を指す。各等級の人は政治、経済、法律上平等ではなかった。このような民族差別政策は、社会の不安を引き起こし、元朝の滅亡の重要な原因の一つとなった。(下線 9)

「放課後課題」

1. 統一多民族国家発展の視点から、元の統一の歴史的意味は何か説明しなさい。

	<p>第17課 明の滅亡 満洲の興隆と清軍の入関 明代末期には、中国の北東部に住む女真族はだんだん発展し続けた。1616年、ヌルハチは女真族の各部を統合し、政治権力を確立した。この国は大金と呼ばれ、歴史上は後金と呼ばれていた。ヌルハチは明朝との戦いに勝って、明朝の北部に重大な脅威となった。ヌルハチの死後、皇太極が王位継承し、明代を攻撃し続けた。1635年、皇太極は女真族を満州民族に変更した。翌年、国名を清に変更した。 (省略) 「発展的な内容」 八旗制度 ヌルハチは女真族の各部を統一する過程で、八旗制度を確立した。所属人員を8つの旗に編成し、生産、行政、軍事の3つの機能を結合し、「兵民合一」、「軍政一体」を実行した。旗人は「出れば軍隊になり、帰れば民になる」ので、戦闘力を高め、満洲民族の社会の経済の発展を促した。清が全国の統治を確立した後、旗人は政治、軍事と経済上の多くの特権を享受した。清の後期まで、旗人は官位と俸給を享受していたが、彼らはすでにその時、戦う意欲をなくし、贅沢に安逸に暮らし、能力を失っていった。後の時代、人々は特権を享受しているが正規の仕事をしていない人を「八旗の子弟」と呼んだ。</p> <p>第18課 統一多民族国家の強固と発展 (前略) 清政府のチベットへの関与 清が建国した後、チベットの宗教のリーダーであるダライ五世が首都に行き、お祝いをした。順治皇帝はダライ五世に接見し、「ダライラマ」という称号を授けた。補助金を与え、ポタラ宮を立て直した。康熙の時、清の軍隊はチベットに入り、チベットの分裂の状態を解決した。そして、もう一人の宗教のリーダーに「パンチェン・ラマ」という称号を授けた。その後、すべての「ダライラマ」と「パンチェン・ラマ」は中央政府の許可を受けなければならなくなった。 1727年、清政府はチベットに駐チベット大臣を設置してチベット地方の政務を監督した。1793年、清政府は『欽定藏内善後章程』29条を發布し、チベットの地方行政体制と法規が規範化された。清朝は駐チベット大臣が朝廷の代表で、ダライラマとパンチェン・ラマと共にチベットの事務を管理することを明確にした。パンチェン・ラマの継承については、清政府の許可を得なければならなかった。清政府はこれらの政策を通して、チベットに対する監督を効果的に強化した。 西北の辺境の守りを固める 中国の西北天山以南の広大な地区に居住するウイグル族などの民族の人々は、大多数がイスラム教を信仰しているため、清の時代にこの地域が回部と呼ばれた。康熙時、天山北路のモンゴル族のジュンガル部の首領ガルダンがロシアにそそのかされて、反乱を起こし、天山を越えて回部を攻撃し、東に進軍して青海、モンゴルの多くの地域を占領した。国家の統一を守るために、康熙帝は三度みずから軍を率いて征伐に出て、何度も戦役の中でガルダンを破り、反乱を平らげ、西北部辺境を安定させた。 乾隆の時には回部の貴族の大、小和卓が反乱を起こし、割拠した。彼らは各民族の人々を残酷に襲撃し、人々が強い不満を抱いた。乾隆帝は軍隊を派遣し、大、少和卓だけが捕らえられ、各民族は無罪であり、関与していなかったと宣言した。ウイグル人の支援を得て、清軍は2年間の戦いの後、国を分割した反乱を鎮圧した。清王朝は、バルカーシュ湖を含む新疆地域全体を統治するためにイリー將軍を設立した。清の軍隊は北西部の管轄権を強化するために、新疆の至る所に駐留し、前哨歩哨所を設置した。 清政府の領域 清の前期、中国の領域は西がパミール高原まで、西北がレカシュガルまで、北がシベリアと隣り合わせ、西南がヒマラヤまで、東北が黒竜江の北のスタノヴォイ山脈と樺太まで、東が太平洋と隣り合わせ、東南が台湾とその付属の島（釣魚島と赤尾嶼を含み）まで、南が南海諸島までであった。これにより、土地が広く、人口が多く、国力が強い統一多民族国家を構成した。 「事後課題」 2. 清政府のチベットと新疆の管理は、統一多民族国家を強化し発展させるためにどのようなメリットがあるのか。</p>
<p>中学校二年の歴史教科書下</p>	<p>第12課 民族の団結 民族区域自治制度 中国の民族問題の歴史と現状をふまえて、中国共産党は民族区域自治制度が我が国の民族問題を解決するための基本政策と考え、それを確立した。民族区域自治は国家の支配で、少数民族が居住する地方で地域の自治を実施し、民族が居住する人口と面積の大きさによって、異なる等級の民族自治区と自治機関を設立した。自治区内では、現地民族が主となり、民族内の事務を管理し、自治権を行使する。民族区域自治制度は中国の基本的な政治制度の1つである。1949年に採用された「中国人民政治協商会議共同綱領」は、民族区域自治を基本的な政治制度として定めた。その後、民族区域自治制度は憲法に入った。1984年に「中華人民共和国民族区域自治法」が公布・施行された。 民族は自治区、自治州、自治県に分かれている。1947年、党の中央民族区域自治の基本方針によりモンゴル自治区が成立した。これは中国初の省級少数民族自治区であり、新中国建国後の民族区域自治制度の推進に貴重な実践経験を蓄積した。モンゴル自治区、新疆自治区、広西自治区、寧夏自治区、チベット自治区の5つの民族自治区、30の民族自治州、100余りの民族自治県(旗)は70%以上の少数民族の人が生活している。民族区域の自治を実行することは、国家が各少数民族の内部事務を管理する権利を十分に尊重し保障する精神を表している。さらに、民族の団結を維持し、祖国の統一を強固にし、少数民族の地区の発展を促</p>

進することについて重要な意義を持ち、各民族が協力して発展するための基礎を築いた。国家は多くの優遇政策を実施し、大量の人を派遣し、また技術、資金、物資などの様々な支援を通じて、少数民族区域の経済を強化し、各民族の共栄と発展を促進した。各民族も自分の地域の実情に合わせて、自らの力を発揮し、経済を発展させ、大きな成果を上げた。少数民族の地域の経済は発展を遂げ、すでに中国国民経済の重要な構成部分となり、少数民族の人の生活水準が高まっている。(下線 10)

20世紀末、中央政府は西部地域の開発戦略を決定した。西部地域開発戦略は、5つの民族自治区、27の民族自治州、83の民族自治県を含めた。西部地域開発戦略は、少数民族地域の発展を加速させ、重要なチャンスを作り出した。西部地域開発戦略を実施して以来、少数民族地域の経済・社会の発展を促進するために、インフラストラクチャー、科学、教育、文化などの面で多くのプロジェクトを行った。2006年、青海・チベット鉄道が開通し内陸と国境地域との結び付きが強化され、青海・チベット地域の経済・社会が発展した。

「問題思考」

中国の様々な民族集団の交流と融合に関する歴史的出来事を関連付け、ナショナル・アイデンティティを育成することについて、あなたはどうか考えるか。

「事後課題」

1. 我が国の5つの民族自治区を列挙しましょう。
2. すべての民族集団の共栄と発展を促進するために、中央政府は少数民族地域に多数の幹部を派遣し、地域づくりを促進した。孔繁森は代表の一人である。彼の地域の発展への貢献に関する情報を収集しなさい。

Characteristics of social science in Chinese middle school under multicultural perspective -Through the analysis of Chinese geography and history textbooks-

HELIAN Ruyun*1, KUWABARA Toshinori*2

China is a multi-ethnic and multicultural country. Han Chinese makes up the majority of Chinese population, while there are 55 ethnic minorities. Given this situation, Chinese education focuses on the formation of national consciousness, and emphasizes the coexistence of multiple cultures. In order to ensure the formation of national identity, the term "Chinese nationality" was settled for Han Chinese, other 55 ethnic minorities and Chinese overseas. In this research, we will clarify how Han Chinese and ethnic minorities are portrayed in Chinese education system, which aims for multicultural symbiosis in education. Thus, we will get a clear sense of the characteristics of Chinese multicultural symbiosis education. Therefore, I took up American educator James Bank's multicultural education theory as a previous research and examined it. And I illustrated the characteristics of how the concept of ethnic groups are depicted in a geography and history textbooks of a secondary school in China from multicultural perspective.

Keywords: Multicultural education, Analysis of textbooks, Social studies, China, Ethnographic group

※1 Graduate student, Okayama university graduation school of education

※2 Okayama university graduation school of education
